

2022年9月 診療カレンダー

住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8  
 メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
 TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

2022年10月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	31	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11★	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	1

・健康フェア遊びに来てね  
 ・健康診断やっています

ホームページ  
 院長ブログ公開中

18時最終受付

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	1/8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	3	4	5

「今月の言葉」  
 音楽が自身の中につくりだす大きな精神的世界は、  
 物質的貧困を終わらせる  
 ～アブレウ博士(エル・システム創設者)～

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:30-19:00	×	●	●	●	●	×	×

●9:00-12:30

★ **健康フェア 9/11(日)13:30-17:30**  
 メディカルプライム日本橋小伝馬町にて  
 院長講演会 14:00-、16:30-

## 森のうた

9月に入りました。日が暮れると秋の虫の音が聞こえてくるようになりましたね。この夏は本当に厳しい暑さでしたが、皆さまはこの夏はいかがお過ごしでしたか？  
 当院は8月11日から15日まで夏休みをいただきましたが、我が家では息子が高3の受験生のため今年は家族旅行はありませんでした。先月号で触れたとおり、8月11日は娘のヴァイオリンの発表会、そのほかの日も発熱外来や事務的な作業をしていたこともあり、実質的なお休みは2日程度でした。その2日も妻は仕事でしたので、ネットやYouTubeを見ながら料理を一生懸命頑張りました。出来栄は不格好でも、妻や子供たちが喜んで食べてくれたのが嬉しかったです。

本番の前1週間ほど、河口湖のほとりの合宿所に集合し、練習を重ねて、本番前日に全員がバスに乗り込みサントリーホールを目指し本番の演奏会を行なうという、ハードなスケジュールでした。指揮者は今では有名になった藤岡幸夫さんで、当時は慶応大学を卒業したてのおしゃれな「慶応ボーイ」でした。この演奏会の直後にイギリスに留学することが決まっていた、「俺はイギリスで成功するまで絶対に日本には帰ってこない！」と豪語するかなりイケイケの若者で、彼の指揮者としてのエネルギーは練習中から、ものすごいものがありました。集まってきた学生たちの音楽を楽しむ爆発的なノリの良さには、圧倒されました。これは一種のカルチャーショックでした。私が在籍していた北大オーケストラは常任指揮者はまもなく還暦を迎える年齢でしたし、我々は思いっきり演奏するというよりは、音程や弾き方などを美しく揃えることに主眼があり、ノリノリで弾くということは全くありませんでした。この全日本医科学生オーケストラ・フェスティバルでの体験は現在にいたるまでのオーケストラを心から楽しむという原点になっています。

今年久しぶりに行動制限のない夏休みということで、娘は中学校のキャンプに参加し、8月19日～21日までは新潟で行われた「ジュニアオーケストラ・フェスティバル」に参加しました。これは日本各地にある、公立のジュニアオーケストラの7団体が新潟のクラシックホール「りゅーとぴあ」に集まり、団の交流や合同練習、最終日は演奏会を行うものです。娘は江東区にある「ティアラこうとう・ジュニアオーケストラ」の団員として初めて参加してきました。私も最終日に東京駅から新幹線に乗り、日帰りで新潟まで行ってコンサートを聴いてきました。「りゅーとぴあ」は美しい田園の緑と青い空の下にたたくガラスが多用された見事な音楽ホールでした。そのホールいっぱいに、若者たちが燃え上がるような熱量で情熱的に演奏する姿に心を打たれました。娘も目を輝かせて「信じられないくらい楽しかった！！もっとみんなと一緒にいたかった！」と興奮していました。娘の話聞きながら、私は30年以上前の大学1年生の夏休みが蘇ってきました。

故 岩城博之さんの著書『森のうた』はオーケストラを指揮したい、その熱意で胸一杯の著者、岩城宏之と、芸大同窓の山本直純との、ハチャメチャな、でも音楽にはとことん真摯な二人の大学時代を描いた青春記です。  
 刊行されたのは1987年で私が初めて読んだのは1990年代だと記憶しています。その熱量は私の大学オーケストラへの情熱と重なるところがあり、無我夢中で読みました。当時は岩城宏之さんも、山本直純さんもご存命で、岩城宏之さんはどちらかというクールな指揮に見えましたし、山本直純さんは「寅さん」などの大衆音楽で有名で、学生時代彼らがあれほどまでに情熱をもってオーケストラにのめり込んでいたというのが意外でした。  
 以前、ベネズエラのエル・システムを紹介したことがありますが、オーケストラというのは個人で楽器を演奏することの何倍もの喜びと楽しさ、幸福なエネルギーを与えてくれる何とも不思議で集合体です。

私は大学1年生の夏休みに、東京のサントリーホールで開催された「第10回 全日本医科学生オーケストラ・フェスティバル」に参加しました。元来、医学部は単科大学が多く、楽器が弾けてもオーケストラの編成は難しいということで、大学の垣根を越えて医学生みんなが集まってオーケストラを作ろう！というのが趣旨でこのオーケストラはできたようです。私が参加した第10回は節目の記念演奏会だったため、参加者は例年以上に膨れ上がっており、なんとヴァイオリンだけでも60-70人ほどおり、サントリーホールの舞台に全員は乗り切れないということで、私は残念ながら前半だけの参加でした。

岩城さんの『森のうた』は20世紀の大作曲家、ショスタコーヴィッチが作曲したオラトリオ「森の歌」で締めくくられます。岩城さんの『森のうた』は東京芸術大学がある「上野の杜(もり)」の「杜(もり)」とかけて、彼らが謳歌した芸大での青春時代を表したようです。  
 娘が参加した「ジュニアオーケストラ・フェスティバル」の「りゅーとぴあ」のホールからも、コロナ禍に若者たちの力強く未来に向かって踏み出す「希望の歌」が私には確かに聴こえてきました。

